



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室内

TEL&FAX. 029-853-6339



日本女子体育大学

日本野外教育学会 第27回大会（東京） 案内

巻頭言「野外教育学会に期待すること」 久保田康雄	2
日本野外教育学会第27回大会案内	3~5
日本野外教育学会第6回研究集会報告	6
コラム「民間団体との共同研究の取組」	7~8
2023年度 野外教育に関する学位論文題目リスト	9~11
事務局便り	12~13

巻頭言 野外教育学会に期待すること

久保田 康雄 (NPO 法人千葉自然学校)

最近、会議の席上で、「その根拠となる証拠は何ですか」とか「エビデンスが必要ですね」というような会話がよく聞こえてくるようになりました。野外教育学会が発信する研究成果やエビデンスが、民間団体や行政などの事業計画や施策に反映され、社会をより良い方向に変えるきっかけとなればいいなと思っています。そんなことを感じた例を二つお話したいと思います。

過去、私は長年にわたり国立青少年教育振興機構に所属し、日本各地の国立青少年教育施設で勤務しておりました。各施設では、毎年春になると新任の職員を迎えます。彼らのうち何人かは学校教員との人事交流であり、数年間青少年教育施設で働くこととなります。施設職員は、毎年数万人の利用者に対して、生活指導や自然体験活動の指導を行いながら、様々な事業を企画する経験を積んでいきます。そして、その職員の任期が終わるころには、大きく成長した職員の姿に毎年驚かされます。その成長の要因は何かとずっと思っていたところ、「野外教育研究」にそのことについて言及している研究がありました。「指導感の変化」に着目した研究です。

この研究は、青少年教育施設における自然体験活動の指導経験が教員の指導感に及ぼす影響とその要因を明らかにするものです。研究の結果としては、職員の自然体験活動の指導経験が子どもや体験活動に関する「指導感」に変化を与え、「子どもの主体性に任せた指導」や「子ども自身で成長できる」という考え方に影響を与えたことが明らかになりました。つまり、自然体験活動行っている子どもが主体的にふるまい自らで成長しているのを見て、それに合わせた指導法を考えるようになったということです。

最近、国立の青少年教育施設では学校教員との人事交流が減少する傾向にあると聞いています。野外教育学会と国立青少年教育振興機構とが連携し、上記のような研究の成果を学校教員や教育委員会に上手にフィードバックすることで、学



校教員との人事交流が積極的に行われるのではないかと考えます。このように研究の成果やエビデンスを行政の施策に反映させるような働きかけや機能が必要であり、野外教育学会のミッションの一つではないかと思っています。

もう一つの例は、地域に根差した自然体験活動と地域愛着の変容について調査している研究です。千葉県の南房総市では、平成22年から「南房総学」の取り組みをしています。「南房総学」とは、子どもたち自身が住んでいる南房総に対しての郷土愛をゆっくと育む学習を小中学校の9年間取り組んでいる教育施策です。この調査の対象は、学校教育のカリキュラムとしてシーカヤックやSUPや登山などの自然体験活動を盛んに行っている南房総市にあるA学園の中学生です。研究の結果は、地域愛着を構成する「選考」、「感情」、「持続願望」のすべての因子において自然体験活動前と比較して、活動後に有意に向上しました。今後は、さらに縦横断的な調査を行い、経年変化や学年、学校ごとの差を見ていくこととしています。この調査は、NPO法人千葉自然学校職員と野外教育学会の研究者が連携して調査を行い、その成果を南房総市の教育施策に反映し、児童生徒が地域への郷土愛をより着実に育むことを目指しています。

以上、2つの例を見てきましたが、今後はさらに全国で活動している多くの民間団体や自然学校等と連携して研究を進めて頂くことと、研究の成果の発信の仕方について、さらなる議論を深めて頂くことをお願いしたいと思います。

<参考文献>

小宮山 咲希・大友 あかね・佐藤 冬果・坂本 昭裕(2022): 青少年教育施設における自然体験活動の指導を経験した教員の指導観に関する研究、野外教育研究、日本野外教育学会、第25巻

徳田 真彦・棟田 雅也・篠原 準・神保 清司・白井 健(2023): 中学生に対する地域に根差した自然体験活動が地域愛着の変容および地域愛着と行動意図の関係性に及ぼす影響—南房総学に着目して—、野外教育研究、日本野外教育学会、早期公開

日本野外教育学会第27回大会（東京）のご案内

第27回大会実行委員長 野口 和行（慶応義塾大学）
事務局長 中丸 信吾（日本女子体育大学）

大会テーマ「すべての子供たちに野外教育を～誰一人取り残さない社会を目指して～」

日本野外教育学会第27回大会を日本女子体育大学にて開催する運びとなりました。いま子供たちの体験を取り巻く環境は多様化・複雑化しており、コロナ禍による自然体験の機会の喪失、学校の外で行われる体験機会の格差（体験格差）など、さまざまな問題が指摘されています。ご存じの通り、文部科学省ではコロナ禍で縮小してしまった「リアルな体験」の機会を充実させることを目指し2022～2024年度を「体験活動推進重点改革3か年」と位置付けて取り組みを推進することが示されています。そして、日本野外教育学会からも「野外教育を通じて子供の育ちを支える～すべての子供が豊かな自然体験を享受できる社会を目指して～」という政策提言をしており、社会全体で子供たちの育ちを支える機運が高まっています。このような背景から、今大会のテーマ「すべての子供たちに野外教育を～誰一人取り残さない社会を目指して～」を設定させていただきました。誰一人取り残さない社会を目指して今後の野外教育がどうあるべきかを考えるきっかけになればと考えております。本学は新宿駅から電車で15分という好立地にありますので、ぜひとも多くの会員の皆様に参加いただき、有意義な時間を過ごしていただければと考えております。

主催 日本野外教育学会
共催 日本女子体育大学
後援 文部科学省、東京都教育委員会、世田谷区教育委員会（申請中）

内 容 15:00-17:00 障害者クライミングの体験
終了後に懇親会（希望者）

講 師 小林 幸一郎 氏、木本 多美子 氏
（NPO法人モンキーマジック）

場 所 三鷹ジム（JR三鷹駅から徒歩1分）

参加費 3,300円（施設利用料別）／定員5名

C. 御岳ラフティングツアー

内 容 ラフティングツアー、児童養護施設のラフティング体験に関する事業紹介

講 師 小田 弘美 氏（NPO法人奥多摩カヌーセンター）

場 所 御岳エリア（東京都青梅市）

参加費 5,500円（予定）／最少催行2名

※詳細は、大会ウェブサイトにてご案内いたします。

大会申込フォームより事前にお申し込みください。

1. 期日

2024年6月28日（金）～30日（日）

2. 会場

日本女子体育大学
〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1

3. 大会日程

【第1日目：6月28日（金）】 エクスカーション

A. 森林教育プログラム体験

内 容 森林教育活動体験、演習林見学、研究交流討議

講 師 杉浦 克明 氏（日本大学生物資源科学部）

大石 康彦 氏（森林総合研究所）

コーディネーター 山田 亮 氏（北海道教育大学）

場 所 日本大学生物資源科学部（藤沢キャンパス）

参加費 2,000円

B. 障害者クライミング体験～ブラインドクライマー世界チャンピオンと登ろう～

【第2日目：6月29日（土）】

8:15～ 受付

9:00～11:00 自主企画シンポジウム

11:15～ 理事会

12:45～ 開会式

13:00～14:10 基調講演

テーマ『すべての子供たちに自然体験を』

講 師 養老 孟司 氏

14:20～16:20 実行委員会シンポジウム

テーマ

『誰一人取り残さないために、野外教育に何ができるのか』

シンポジスト

吉岡 マコ 氏 (シングルマザーズシスターフッド)

今井 悠介 氏 (チャンス・フォー・チルドレン)

原田 順一 氏 (みんなのアウトドア/日本アウトドアネットワーク)

未 定 (こども家庭庁) ※打診中

コーディネーター

吉松 梓 氏 (明治大学)

16:30～17:20 研究発表 I (ポスター)

17:30～ 総会

18:40～20:10 懇親会

【第3日目：6月30日(日)】

8:30～ 受付

9:00～10:30 研究発表 II (口頭)

10:45～12:00 研究発表 III (口頭)

昼食・休憩

13:00～14:15 研究発表 IV (口頭)

14:30～ 閉会式

4. 第27回大会専用ウェブサイト

大会の詳細と参加者へ案内の確認、各種申し込みや原稿提出は、下記 URL から行ってください。

<https://27th-jwcpe.joes.gr.jp>

5. 大会参加申し込み

第27回大会専用ウェブサイトで申し込みの上、参加費等を納入してください。

【事前申込期限：2024年5月6日(月)】

※5月6日(月)までに入金を確認できない場合、当日参加料金をいただきます。また、一旦納入された参加費等の返金はしません。

6. 研究発表・実践報告の申込および原稿提出

第27回大会専用ウェブサイトで申込をしてください。またそれぞれの「抄録原稿提出要領」に従って抄録原稿データを提出してください。

【申込期限：2024年4月19日(金)】

【原稿提出期限：2024年5月6日(月)】

7. 自主企画シンポジウムの申込および原稿提出

「自主企画シンポジウム」とは、第27回大会に参加する学会員自らが、テーマ、司会者、話題提供者、指定討論者等を設定して実施されるシンポジウムです。

企画を希望する会員は、第27回大会専用ウェブサイトから申込みをしてください。

また、「自主企画シンポジウム抄録原稿提出要領」に従って抄録原稿データを提出してください。

【申込期限：2024年4月19日(金)】

【原稿提出期限：2024年5月6日(月)】

8. 大会参加費・懇親会費

〈大会参加費〉

	申込期限前料金	期限後料金
正会員(一般)	5,000円	6,000円
正会員(学生)	3,000円	4,000円
団体会員	5,000円	6,000円

※会員の参加費は抄録代(PDF配布)を含む

非会員(一般) 3,000円/日

非会員(学生) 2,000円/日

※非会員の参加費は抄録集代(2,000円)を除く。

非会員は申込期限前・期限後ともに同額とする。

基調講演のみ(一般公開) 1,000円

〈懇親会費〉

正会員(一般)・団体会員・非会員(一般) 6,000円

正会員(学生)・非会員(学生) 4,000円

9. 参加費・懇親会費の納入方法

参加費の納入方法は、オンライン決済サービス「Peatix」で行います。手続きは大会ウェブサイト「大会参加費支払い」のページから行ってください。一旦納入された参加費等は返金いたしません。

10. 若手優秀発表賞について

若手研究者の研究活動を推進するため、研究のオリジナリティ、有用性、発表方法、発表技術について審査し表彰します。受賞者には賞状と副賞を授与します。選考対象者は以下の要件を満たしている方とします。

1. 本学会の正会員(一般/学生)である。
2. 研究発表(口頭)の筆頭及び演者である。
3. 年齢が35歳未満(当該年次大会時)である。
4. 発表申込時に若手優秀発表賞の審査を申請した者

(エントリー制)。

1.1. 宿泊および食事について

宿泊は各自で手配してください。なお、京王線沿線は新宿駅だけでなく下り方面の調布駅や府中駅にもいくつか宿泊施設があります。

また、当日学生食堂および学内コンビニは営業していません。近隣にセブンイレブンがあります。食堂などは千歳烏山駅周辺にあります。弁当(800円)を注文される方は、参加申し込み時に注文してください。

1.2. 託児

大会期間中、下記時間帯に学内にて託児をご利用いただけます。会場は受付でご案内します。

対象:6ヵ月～6歳の未就学児(小学生はご相談下さい)

日時:①6月29日(土)8:30～17:30(昼食を除く)

②6月30日(日)8:30～15:00(昼食を除く)

料金:①6,000円/日 ②4,000円/日

※詳細は、大会ウェブサイトにてご案内いたします。大会申込フォームより5月6日(月)までにお申し込みください。

1.3. 会場までの交通機関

・京王線「千歳烏山駅」から

小田急バス「千歳烏山駅北口」より「吉祥寺駅」行きに乗車し、「日本女子体育大学前」下車すぐ(約7分)
徒歩の場合:千歳烏山駅より徒歩約20分

・JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」から

小田急バス「吉祥寺駅」2番乗場より「千歳烏山駅北口」行きに乗車し、「日本女子体育大学前」下車すぐ(約25分)

※会場へのアクセスの詳細は、大会専用サイトを参照してください。

1.4. 第27回大会事務局・問い合わせ先

〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1

日本女子体育大学 中丸信吾研究室

日本野外教育学会第27回大会事務局(中丸)

E-mail: 27th-jwcpe@joes.gr.jp

※お問い合わせは、E-mailでお願いいたします。

発表資格および注意事項

◆発表の資格に関すること

1. 筆頭者および演者は、正会員、名誉会員、団体会員(一

般)、賛助会員、および大会実行委員長が認めた者とする。ただし、非会員であっても外国人研究者に関してはこれを認める。

2. 共同研究者には、非会員が名前を連ねても差し支えない。

3. 筆頭者および共同研究者に関して、会員は年会費を期日までに完納していること。また、非会員は所定の発表投稿料(3,000円)を期日までに納付すること(参加費とは別)。

4. 自主企画シンポジウムの主たる企画者(主催者、責任者)は、正会員、名誉会員、団体会員(一般)、賛助会員、および大会実行委員会が認めた者とする。ただし、非会員であっても話題提供者、指定討論者等として企画に携わることはできる(無料)。

◆発表の方法等に関すること

1. 原則として、野外教育研究の投稿規定に準じた未発表の研究に限る。

2. 筆頭の発表(口頭発表、ポスター発表、実践報告)は、1回の大会において1題目に限る。

3. 発表の言語は、日本語あるいは英語とする。

4. やむをえない理由で演者が発表できなくなった場合、事前に大会実行委員長の承認を得て、共同研究者による代演を認める。

◆抄録原稿に関すること

1. 一度提出した抄録原稿の訂正はしない。

2. 発表された抄録は、学会ウェブサイトに掲載する。

◆その他

1. 本学会が定める倫理規定を順守すること。

2. 以上の発表要件に満たない研究は、発表を取り消す場合がある。

第6回研究集会報告

企画委員長 野口 和行（慶應義塾大学）
実行委員長 伊原 久美子（大阪体育大学）
実行委員 青木 康太朗（國學院大学）
高橋 徹（岡山大学）
張本 文昭（沖縄県立芸術大学）
吉松 梓（明治大学）

第6回研究集会を2023年12月16日（土）に大阪体育大学同窓会館で開催しました。初の大阪会場でしたが、24名が対面参加、4名がオンライン参加、14名がオンデマンドでお申し込みいただきました。

研究集会の目的は、学会員の研究推進に資することであり、本学会の企画委員会事業として毎年開催しています。今回は実行委員で協議した結果、一つ目は近年、青少年教育施設の閉鎖等が問題となり、その価値が問われていることから「地域付加価値創造分析」をテーマとしました。二つ目は、質的研究の中でも注目を集めている「複線径路等至性アプローチ（TEA）」をテーマとしました。

午前は「青少年教育施設の経済的な効果について考える」というタイトルで、日本体育大学の横田匡俊先生にご講演いただきました。はじめに、公共スポーツ施設の運営について実際の収支決算書を見ながら解説いただきました。次に、公共スポーツ施設の経済的な効果を分析する産業連関分析と地域付加価値創造分析について、実際の施設の分析結果を基に解説いただきました。また、これらの分析の活用例や実践現場での提案もご紹介いただきました。これまでの野外教育研究ではあまり研究されていない領域でしたので、非常に重要な視点を提供いただきました。

午後は「複線径路等至性アプローチ（TEA）の実際」というタイトルで、立命館大学のサトウタツヤ先生にご講演いただきました。はじめに、数多くある質的研究の手法を2つの軸で分類する「質的研究法のマッピング」をご紹介いただき、TEAの位置づけを解説いただきました。このマッピングは質的研究の手法を整理する上で非常に参考になるものでした。TEAとは、「実現した経路」と「実現しなかった経路」を描くことで人生経路を描く手法であり、実際に演習をしながら理解を深めていきました。また、文化心理学の考え方や日常から非日常への移行を表す「移境態」についても解説いただき、研究手法だけでなく野外教育との親和性を感じることができました。

アンケート結果による参加者の評価は、満足度が高く、これからの研究へ弾みをつける機会となったことが窺えました。この研究集会が、会員や学会全体の研究推進に貢献することを願っています。ご参加ならびにご協力いただいた皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。なお、講演の詳細は年度内に発刊される「野外教育研究」に掲載されますので、是非ご覧ください。

（文責：伊原久美子）

コラム「民間団体との共同研究の取組」

原田 順一(日本アウトドアネットワーク事務局長)
徳田 真彦(大阪体育大学)

1. 研究プロジェクトの概要

現在、貧困を原因とする体験格差や教育格差の解決に向けアプローチするため、一般社団法人日本アウトドアネットワーク(以下 JON)が実施している「ひとり親家庭支援事業(以下 SPS)」を取り上げ、SPS に参加した子どもや保護者への効果測定、SPS 事業の普及に向けた事業運営者および参加者へのニーズ把握、参加の障壁となる要因の検討を研究プロジェクト化し取り組んでいます。プロジェクトは JON 代表理事の成田裕氏、明治大学吉松梓先生、筑波技術大学向後佑香先生、私たちの計5名で民学連携の形で進められています。2023年度には、SPS 事業を実施する民間団体(20団体)にご協力頂き、参加者やその保護者に「自尊心」や「子育てレジリエンス」の調査を実施しました。研究者だけでは取り組むのが難しい調査も、民間事業者の協力を得ることで実施可能となったり、民間事業者だけでは難しい学術的なアプローチは研究者が協働するなど、有機的に連携をしつつ進められています。未だ進行中ではありますが、プロジェクトを行う中で感じているメリットや留意点などを共有させて頂き、皆様の研究活動に少しでもお役に立てば幸いです。

2. 研究プロジェクトを行うようになったきっかけ

共同研究を行うようになった前段として、我々が「走林社中」という桜井義維英氏(NPO 法人国際自然大学校理事)を主宰とする若手の指導者養成を行うコミュニティを通して出会い、普段から情報共有をしたり、互いの興味関心について話すような関係性になっていたことがあります。一方、JON が SPS に取り組みはじめ、社会的意義が大きい活動として一定の評価を受けながらも、持続可能性については大きな課題として残されていました。それについて互いの見解を話している中で、民学が連携し SPS の持続可能性を高めることはできないか、という話へと発展し現在のプロジェクトが始動しました。

※プロジェクトや走林社中の詳細は二次元バーコードを読み取りご覧ください。

3. 共同研究を行うメリット

ここからは、共同研究を行うメリットや留意点について、民間事業者、研究者それぞれの立場から述べたいと思います。

(原田)

まずは、エビデンスが取れるということです。我々民間事業者は、当然のことながら子どもだけでなく、保護者とも関わります。その中で、自然体験活動をすることでの効果は伝えられますが、それは感覚や経験値での話が大半を占めます。そこに、数値と言う客観的視点が入ってくると、より説得力が増すという点が大きなメリットなのではないでしょうか。また、自然体験活動の価値は形として手に取ることが難しいので、その付加価値や私たち民間事業者の存在価値を高めてくれると思っています。まさに、体験の価値を一つの形にしてくれているということであり、活動の価値だけにとどまらず、団体そのものの評価やアピールポイントにもなっています。そして、その数値は保護者を納得させる材料になるだけではなく、私たち民間事業者の次への活力や、活動の課題などを見つける一つの視点になります。要するに、ふりかえりのポイントになっているということです。もちろん、数値だけに囚われてはいけませんが、外から見える客観的な視点は間違いなく活かせる内容だと思います。このように、学識者の方々と繋がり、共同で動くことにより私たちの活動が様々な先生方や関係者の目に留まることは、喜ばしいことだと感じています。

(徳田)

民間事業者とのコミュニケーションが増えたことで、「何の(誰の)ための研究なのか」を考える機会が増え、研究の意義や必要性を再確認することで、研究活動のモチベーション向上に繋がっています。また、協働する中で自然と生まれる様々なコミュニケーションを通して、実践現場の最新情報や実情について知ることができ、実践現場の課題やどのような研究を求めているのかなどを考えられることもあり、研究に繋がるアイデアや観点を得られるとても



良い機会であると感じています。一方、研究の観点では、研究者だけでは困難な調査も民間事業者の協力を得ることでスピーディに実現できることや、得られた結果についても民間事業者の観点から議論ができることで考察の深まりなどを実感しています。より広い観点で、深く議論ができることで、研究の質向上に繋がっていると感じています。また、こういった研究プロジェクトの動きを民間事業者や研究者が知ることで、新たなプロジェクトが生まれるといった副次的な効果も期待できるのではないかと思います。

4. 共同研究を行う際に留意しておきたいこと

(原田)

研究を行うことによる、最終的な目的は同じですが、そこに至るまでのアプローチ方法やスケジュール感、現場との温度感などのズレが心配な要因としてあげられます。特に、アンケート調査ひとつをとっても、「この時間は難しいな」とか「事前に保護者をお願いするのは…」など、団体においても参加者との距離感が違います。複数の団体からアンケートを取るとなると難しいかもしれませんが、団体にあった調査方法が必要なかもしれません。例えば、調査方法も紙媒体なのかwebなのかという視点からの話になります。また、我々事業者は、保護者と研究者の間に入り両者を繋ぐ役割をすることが多くなると思うのですが、この研究は何のために、何を狙っているのかを明確に答えられることが、最も重要なことなのだと感じています。保護者との関係性にもよりますが、相手側に不審に思われたいような答えと対応が大切なのだと思います。そういった意味では、コミュニケーションをしっかりとる形のスケジュールやツール、情報の共有は不可欠なのだと思います。個人的には、専門性のある用語の意味が全く分かりません。そうすると、他者に説明することも一苦勞です。

もちろん仕方のないことですし、だからこそ役割分担をしているわけですが、私たち事業側も興味をもち勉強して理解していく機会がもっとあると良いかもしれません。

(徳田)

研究計画や役割分担、研究成果の活用方法を明確に共有できていることがとても重要であると思っています。研究内容によって大小ありますが、研究を行うには一定の経済的、物理的負担が伴います。それは共同研究を行う上で共にクリアしなければならない課題であり、どちらかが一方的に負担を負う形ではより良い協働は生まれません。そのため、共同研究者に対して研究のフローや具体的な手続き、どのような役割を担うのか、費用がどの程度かかるのかなどを明確に説明し、互いに納得した形でスタートすることがポイントであると思っています。研究者にとって費用や調査手続きなどを民間事業者に相談しづらいと感じる部分もあると思いますし、民間事業者にとっては研究計画を詳細に聞くことは煩わしい部分もあると思います。しかし、それらを互いに議論しながら研究計画を詰めていくことが、結果として相互理解や研究の質向上に繋がることもあり、非常に重要なプロセスであると思っています。また研究成果を効果的に活用していく方法について検討しておくことで、目的意識が強化され研究活動のモチベーション向上に繋がっています。

5. おわりに

(原田)

私たちが考える、活動への思いの部分を手前に形にしてください。甘えることなく、共同という意味を忘れずに共に二人三脚で進んでいきたいと思っています。目的地のその先までは突っ走りましょう。

(徳田)

民間事業者、研究者それぞれの立場や役割がありながらも、互いの実情や考え、課題などを共有しながら相互理解を深めていくことが必要であると思っています。実践と理論の融合を目指し引き続き邁進したいと思います。



「走林社中」

<https://soulin2017.net/>

2023年度 野外教育に関する学位論文題目リスト

日本野外教育学会広報委員会は、会員みなさまにご協力いただき、国内の大学の学部生・大学院生が昨年度執筆した野外教育に関する学位論文（博士論文、修士論文、学士論文）の題目情報を収集し、題目リストを作成しました。会員みなさまの情報交換や研究の動向把握などにご活用ください。

- ・本リストは日本国内で執筆された野外教育に関するすべての学位論文の題目情報は網羅していません。
- ・2024年2月末までに会員の方々から提供していただいた情報をもとに作成しています。
- ・執筆者本人の許諾を得て、指導教員が野外教育に関係する内容であると判断した題目を掲載しています。

博士論文（大学院博士後期課程）

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
筑波大学大学院	蓬田 高正	自己調整学習の方略使用を促進する大学体育授業に関する研究 —ASEを導入した授業を題材にして—	人間総合科学学術院	大学体育スポーツ 高度化共同専攻	坂本 昭裕

修士論文（大学院博士前期課程・修士課程）

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
仙台大学大学院	千葉隆人	スキー競技における不安について—競技特性と不安の関係に着目して—	スポーツ科学研究科	スポーツマネジメント領域	井上 望
筑波大学大学院	金谷 洸晟	自然体験宿泊学習が学級風土に及ぼす影響 —児童生徒の生きる力と引率教員の資質能力との関係に着目して—	人間総合科学学術院	体育学学位プログラム	坂本 昭裕
	折居 巧朗	組織キャンプが高校生の原生自然観へ及ぼす影響		体育学専攻	渡邊 仁
	谷中 理矩	MTBトレイルビルド活動がアウトドアフィールドへの愛着に関する研究			
東京海洋大学大学院	伊藤 裕樹	スタンドアップパドルボーディング(SUP)の海難事故及びSUP愛好者の安全意識に関する研究	海洋科学技術研究科	海洋管理政策学専攻	千足耕一
東京学芸大学大学院	上江洲 利保	長距離ウォークを軸としたチャレンジ的野外活動における大学生スタッフの想いと —小学生が参加する100km・4泊5日の徒歩旅における質的研究—	教育学研究科	次世代日本型教育 システム研究開発専攻	小森 伸一
	原田 有里子	野外活動における「感動」体験とその効果についての研究 —教員養成大学の実習参加者を対象としたケーススタディ—			
	三原 大芽	体験学習に関する理論の再検討 —ドレイファスとテイラーの「接触説(Contact Theory)」を用いて—			
信州大学大学院	中野 未久	野外活動指導者の初期段階における行動特性モデルの開発	総合人文社会科学研究科	心理学分野 発達科学・ 認知科学・人間科学領域	瀧 直也

学士論文（学部）

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
北海道教育大学 岩見沢校	伊藤 涼葉	自然の直接体験による教育が同年齢群と異年齢群に与える効果の違い	教育学部	芸術・スポーツ文化学科 スポーツ文化専攻 アウトドア・ライフコース	能條 歩
	石村 成巳	大学生の防災意識調査と意識を高める効果的な防災教育の方法			
	五十嵐 晃貴	登山における安全意識とファーストエイドキットの関連性			
	大橋 天音	女性登山者の快適な登山に関する研究			山田 亮
	井上 隼太	大学生の野外教育指導経験が社会人基礎力に及ぼす影響			
	櫻井 あかり	キャンプ実習における大学生の学習動機が生きる力および自尊感情に及ぼす影響			
	廣松 桜侑	野外炊事で育まれる災害時に役立つ力			
	若狭 郁実	自然体験活動による小学生のレジリエンス向上効果について —日高アドベンチャーキャンプの事例から—			
北翔大学	井上 快星	天体観望が感情におよぼす影響	生涯スポーツ学部	スポーツ教育学科	坂谷 充
	小幡 郁乃	—多面的感情状態尺度短縮版によるアンケート調査から—			
	清水 隆司	大学生がキャンプ指導者経験から得られる学びの特徴 —野外教育指導演習を事例として—			
仙台大学	佐々木凌哉	レジャーとしてのサーフィンが与える心身への影響とそのリスク～宮城県亘理町 鳥の海のサーファーを事例にして～	体育学部	体育学科 スポーツマネジメントコース	井上 望
	種村元太	S大学生が考える野生感について—キャンプ前後の考え方の違いに着目して—			
	大森柊也	野外教育が知的障害者に与える影響～過去の事例を参考に～			
	藤田駿	スキー・スノーボードにおける傷害傾向と特徴から考える傷害予防～全国と宮城 県の比較から～			
	佐藤謙信	スキー実習でのスキーの魅力の変容について～S大学のスキー実習に着目して ～			
	小野寺瑞樹	体育系大学の学外実習に関する研究～キャンプ実習に着目して～			
	竹内陸	バックカントリースキーがもたらす気分変化について			

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
筑波大学	大熊 建	低山における登山者の怪我への意識調査	体育専門学群		坂本 昭裕
	木之下 歩夢	ASE体験が大学水球選手の集団凝集性に及ぼす影響			渡邊 仁
	工藤 優太	茨城県におけるダイビングショップ業界の現状 —コロナ禍のショップの経営状況・ダイビングイメージに着目して—			
東京海洋大学	幸王 啓佑	熟練ダイビングガイドのセーフティ・マネジメント	海洋生命科学部	海洋政策文化学科	千足耕一
	佐藤 新太郎	ボートシェアリングの課題と可能性			
東京学芸大学	田口 大洋	幼少期の生物採集体験の多寡と現在の知的好奇心との相関関係についての研究—大学生を対象として—	教育学部	初等教育教員養成課程 保健体育選修	小森 伸一
	濱田 颯大	運動部活動経験がオーナーシップにどのような影響を及ぼすのかについて—大学生を対象として競技期間にも着目して—			
	宮本 優奈	臨海学校での遠泳活動がもたらす「生きる力」及び感情生起についての研究—小学校6年生を対象にして—			
	鈴木 優伽	福島県の中学校における自然体験活動の実態調査 —発展に向けた今後の課題への言及も交えて—			
東京女子体育大学	永岡 美空	野外教育ボランティアの参加動機と継続要因に関する研究	体育学部	体育学科	永井 将史
	宮崎 新菜	スキューバダイビングインストラクターのやりがい感に関する研究			
日本女子体育大学	岩本 優海	産業や観光来島者数の推移からみた新島の魅力に関する調査	体育学部	健康スポーツ学科	中丸 信吾
	内田 菜々海	登山および森林浴による精神的ストレスの回復			
	小林 桃佳	キャンプリーダーにおける志望動機と指導経験を通じた学びについて			
	鈴木 らん	教員を志望する学生の知的障害のある生徒に対する意識やイメージの変化について—特別支援学校の野外活動指導を通して—			
	鈴木 里帆	メディアが野外活動の実施に及ぼす影響			
	関口 真美	過去の自然体験活動により環境保全への意識はどのように影響を及ぼすのか			
	田村 理子	アウトドアブームにおける消費者の日常生活への影響			
	土田 藍子	野外活動が社会人基礎力と日常生活に及ぼす影響			
	利根川 千晴	登山活動後の気分・感情と心の満足度の関連性			
	中口 美帆	子どもの頃の自然体験と家族構成からみた現在の環境配慮行動および環境保護意識の関連について			
	長谷川 彩葉	乗馬経験者と未経験者における乗馬のイメージの違い			
明治大学	岩永 優輝	大学生を対象とした野外活動の効果についての文献レビュー—システムティック・レビューを参考として—	経営学部		吉松 梓
	黒田 和楽	日米間の自然観の差異による野外教育への影響について			
	土屋 亮太	大学生の自然体験活動における初対面同士の関係構築—関係構築に有効な要素の定性的分析—			
東海大学	坂田 温哉	大学生アスリートのライフスキルに学童期の体験が及ぼす影響	体育学部	生涯スポーツ学科	岡田 成弘
	大崎 敦	キャンプスタッフの失敗経験が成長に繋がる過程に関する事例的検討			
	高橋 咲紀	大学のキャンプ実習における感謝体験の生起状況			
	河原井 彩	大学生におけるキャンプ参加の阻害要因—関東在住の大学生を対象として—			
	高木 愛奈	テント泊の人数が睡眠の質に及ぼす影響			
	白鳥 優夏	キャンプ実習に参加した大学生の登山に対するイメージの変化			
	水口 かごめ	大学キャンプ実習が参加者の対人恐怖心性に及ぼす効果			
富所 天馬	サーファーの環境に対する意識及び行動に影響を与えた体験				
信州大学	飯室 旬理	トレイルランニング大会の継続的な参加要因の検討	教育学部	野外教育コース	瀧 直也
	南部 和子	山村留学の教育的効果と保護者の期待		保健体育コース	
	馬場 元規	アフターコロナにおけるキャンプファイヤーの現状と課題			
	荒木 拓真	キャンプが子どもに及ぼす教育的効果の持続性			
至学館大学	杉沼 岳飛	野外活動中にLeave No Traceを実践することによるストレスに関する調査	健康科学部	健康スポーツ科学科	福富 優
	新谷 友基	大学生におけるキャンプが集団凝集性に及ぼす影響			
	山本 倫也	野外活動が被災時の生き抜く力に及ぼす影響			
	大坂 由依	野外実習中における電子機器のない生活に関する調査			

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
びわこ成蹊 スポーツ大学	大崎 力	野外教育プログラムが看護学生のチームワーク機能と社会人基礎力に与える影響	スポーツ学部	スポーツ学科 野外スポーツコース	中野 友博
	可畑 陸功	マリンスポーツキャンプが参加学生の自己効力感と無力感に及ぼす影響			
	河合 文悟	幼児キャンプ指導を経験した大学生のコミュニケーション能力の変化について			
	里村 幹太	琵琶湖周辺住民の琵琶湖に対する関心意欲について			
	仲畑 賢作	日帰り登山者の被服・装備の認識に関する研究			
	山田 柊那	国際交流としての ASE がコミュニケーション・スキルに与える変容			
	上原 心花	小学校における環境教育を目的としたカヤック体験活動の効果～自然に対するイメージに着目して～		スポーツ学科 野外・レクリエーション スポーツコース	黒澤 毅
	片岡 夏美	冒険教育プログラム体験中の感情の変化が大学生の自己成長感に与える影響			
	櫻井 大樹	小学生を対象とした仲間づくり野外プログラムにおけるコミュニケーションスキルの変化			
	内藤 友晶	花の百名山としての赤坂山における登山者の動機と満足度に関する事例研究			
	福山 翔馬	ASE活動がスポーツを学ぶ大学生の課題解決能力に及ぼす影響～その後のスポーツ活動への意識に着目して～			
	細田 孝高	「びわ湖を美しくする運動」に参加した清掃ボランティアの参加動機と満足感が継続意思に及ぼす影響			
	三木 聖也	冒険的野外プログラム体験における大学生の好奇心と自尊感情の変化			
	南出 伊織	マリンスポーツを取り入れたキャンプ実習が大学生の自己成長感に与える影響～達成感に着目して～			
	山本 廉司	ASE活動が大学サッカー選手の協調性と集団凝集性に及ぼす影響～サッカー場面への応用の可能性～			
	池田 裕樹	登山者の登山関与とQuality of lifeの関連			
	石塚 慎平	ソロキャンプ実施者の価値意識に関する研究 ～キャンプ動機と体験評価の観点から～			
	大谷 圭吾	徳島県南における釣り人の釣果と満足度に関する研究 ～アウトドアスポーツを地域振興に役立てるために～			
	笠谷 悠人	ボーイスカウト指導者の指導信念に関する研究			
	隈元 愛実	食育的要素が含まれるキャンプ活動体験の小学生への食育効果 ～食に対する感謝の気持ちと食事観に着目して～			
	西尾 桃樺	キャンプ体験による女子高校生の人間関係形成能力の変容			
	宮本 陽平	琵琶湖でアウトドア・レジャー活動を行う人の環境保全への関心 ～愛着と知識との関連に着目して～			
	吉本 龍生	グローバルキャンプに参加した大学生の多文化コミュニケーション能力の変容について			
	淀川 泰誠	海での自然体験活動に参加した小学生の自然への感受性 ～描画とセンスオブワンダー感情生起から～			
	渡邊 洸生	キャンプにおけるマネジメント・スタッフのやりがい感と負担感に関する研究		スポーツ学科 野外スポーツコース	橋本 和俊
	今若 太陽	カヤックプログラムのフロー状態に及ぼす影響要因の一考察 ～CSバランスと自然状況に着目して～			
角田 星奈	ASE活動におけるリーダーシップとフォロワーシップに関する研究 ～観察法を用いたケーススタディ～				
川崎 麻衣	冒険教育プログラム中のポジティブ関係コーピングが集団凝集性に及ぼす影響				
澤田 琉ノ介	トレイルラントレーニングにおけるアジリティ能力向上の試み :大学サッカー選手のケーススタディ				
田中 智也	大学生ASE指導者の指導継続に関する質的研究 ～成長実感に着目して～				
露無 優稀	富士山と比較した六甲山のイメージ ～SD法を用いた分析～				
松本 尚弥	ASE活動が創造性に及ぼす影響 ～創造性を生み出すコミュニケーション能力と集団特性に着目して～				
宮坂 樹	教育的なグループキャンプとソロキャンプの状態不安と自然への感情に関する研究 ～キャンプ体験者の場面想起による回答からの分析～				
山下 晃大	大学生の火に対する認識 ～過去の自然体験プログラムに着目して～				
若江 元樹	登山者におけるオーバーツーリズムに関する研究 ～観光登山者と徒歩登山者の比較～				
関西学院大学	中村 友香	アプリケーションの使用による小学生のキャンプ中の行動変容に関する研究	人間福祉学部	人間科学科	甲斐 知彦
	曲 奏海	キャンプにおけるアプリを用いたふりかえり活動がキャンパカウンセラーに及ぼす効果			
福岡大学	井野 将希	夏季実習科目がコミュニケーションスキル育成に及ぼす効果	スポーツ科学部	健康運動科学科	築山 泰典
	島村 敏季	大学キャンプ実習が及ぼす獲得的レジリエンスへの影響			
	内田 詩乃	キャンプは大学生のスマートフォン依存傾向の改善に影響するのか			
	甲斐 歩夢	スマートフォンの利用がキャンプに対する集中力へ及ぼす影響		スポーツ科学科	
	辻 隼世	過去の野外活動経験は虫への印象に影響を及ぼすのか			
	河野 泰至	資質的レジリエンスの分類とその変化			
名桜大学	川越 景太	SUP体験者における自己効力感と満足度・継続意欲の相関 -ソーシャルサポートの役割-	人間健康学部	スポーツ健康学科	遠矢 英憲
	稲盛 志歩	グレーディングが示す山岳遭難事故減少への手がかり -長野県の事例研究-			



日本野外教育学会